様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５２８５１１３

研究課題名（和文）組織制度変遷と文化志向の相克：生産性、幸福感、精神機能、遺伝子発現への影響の研究

研究課題名（英文）Friction Between Institutional Change and Individual Cultural Orientation

研究代表者
阿久津　聡（AKUTSU, Satoshi）

一橋大学・大学院国際企業戦略研究科・教授

研究者番号：９０３１３４３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、職場のストレスや幸福感といった主観的感情が個人の健康状態に及ぼす影響を社会・文化的基盤と精神医学・遺伝的基盤の双方の機能から実証的に検証することであった。多くの日本企業で終身雇用が崩壊し、年功序列から成果主義へ人事制度が移行する中、文化特徴的要因とその変遷が日本人の心理と健康に及ぼす影響を調査した。結果、米国に比して日本の中年層に特徴的に見られる要因間の関係性、外資系企業に比して制度変遷の著しい日本企業では制度運営の知覚適正度が従業員のコミットにより大きく影響すること、更にそうした日本企業でも働き甲斐や会社に対する誇りといった要因が健康状態に正の関係を持つことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine how subjective feelings such as stress and happiness in the workplace affect the health condition by taking an empirical approach based on both sociocultural functions and psychiatric-genetic functions. In Japanese companies, a lifetime employment system has collapsed and a seniority-based payment system has been replaced. We examined how Japanese cultural characteristics and the transition affect mental and physical health of Japanese. Consequently, we found that (1) there were unique relationships among key psychological and health factors for the Japanese sample vs. for the U.S. counterpart, (2) the perceived adequacy of the company systems had a stronger relationship with the employee's commitment in the Japanese companies where the system transition had been more drastic than the foreign-owned companies in Japan, and (3) the sense of meaning and pride of one's work and company had positive associations with the employee's health condition.

研究分野：経営組織論

キーワード：経営学　文化心理学　精神医学　エピジェネティクス

１．研究開始当初の背景

日本社会の制度的均衡が失われたバブル崩壊後の「空白の 20 年」の間、実際にそこで生きる人々や企業は大きな負担を強いられてきた。協調的自己観が優勢であり、人々の関係性の原理に基づく従前の日本社会とその企業組織体に、成果主義という個人単位での評価・競争原理が取り込まれてきた（北山 2012; 内田・荻原 2012）。この結果、社会構造と個人心理の双方において、様々な軋みがもはや無視できない程に生じている（山岸 2002）。しかし現時点では、このような社会的軋みが人の生理的反応、特に遺伝子発現を経て個人の健康にどのような影響をもたらすのかについては殆ど知られていない。本研究において、経営学、文化心理学、精神医学、遺伝子発現研究からの知見を統合して、どのようなメカニズムによって、制度的不均衡の結果として労働者が健康被害を被ったり、また企業では生産性が低下したりするのかを体系的に検討することが研究開始当初の背景であった 。

２．研究の目的

本研究の目的は、職場におけるストレス、精神健康、幸福感を支える「社会・文化的基盤」ならびに「精神医学・遺伝的基盤」の双方の機能を検証することであった。その際、特に職場における動機づけ（個人達成志向と関係志向）が幸福感や生産性に与える影響についてのメカニズムを経営学、文化心理学、神経科学、分子医科学（遺伝子発現修飾）の分析枠組みで解明し、新しい経営学的知見を得て実社会にもフィードバックすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究目的を達成するために、今回は (1). 主観的な感情測定アプローチと、(2). 生理指標アプローチの 2 つを並行して実施した。なお、(1). 主観的感情測定アプローチの方法として、(1)‐①：状況サンプリング調査、(1)‐②：ウェブサーベイ調査 a,b、(1)‐③：MIDJA/ MIDUS データ調査、の 3 つを本研究では実施した。それぞれの研究方法の詳細について以下に記述する。

(1)‐①：状況サンプリング調査に関して

複数企業の従業員を対象に、職場での状況記述とその際に生じる感情に関して、状況サンプリング法（Kitayama, et al.,1997）を用いて調査を実施した。より具体的に言えば、日系企業と外資系日本法人という一般的に企業の人事制度が異なることが指摘されている 2 つの集団に属する日本人従業員を対象に、それぞれ相互独立的/個人達成志向的と思われる状況（独立条件）、もしくは相互協調的/関係志向的と思われる状況（協調条件）を過去の経験から複数想起してもらい、各々の状況で生じた感情等について評定してもらった。回答者は日系企業、外資系日本法人のいずれにおいても日本人を対象にしているが、働いている職場が日系企業か外資系日本法人企業かで、各条件において想起される状況やその時に生じる感情等評定に体系的な違いがあるかどうかを調査することが主要な目的であった。

(1)‐②：ウェブサーベイ調査に関して

ウェブ調査 a においては状況サンプリングで得られた知見を基に、より大規模なサンプリングデータによって信頼性・妥当性を担保することを目的として実施した。具体的には、日系企業もしくは外資系日本法人に勤務する日本人を対象に、状況サンプリング法で用いた質問項目に加え、より包括的な制度変数、心理変数及びデモグラフィック変数を回答者に評定してもらったうえで、調整媒介分析 (Moderated Mediation Analysis)を行い、そのメカニズムおよびインパクトの違いを検証した。また、ウェブ調査 b においては、企業従業員や無職者なども含めて対象とし、自己価値のもちかたと職場・社会の価値の認知について測定し、それらのずれがメンタルヘルスに関連する程度を測定した。

(1)‐③：MIDJA/ MIDUS データ調査について

MIDJA (Midlife in Japan) / MIDUS (Midlife in US)とは、日本人および米国人の中高年を対象にした「しあわせと健康」に関する大規模調査データである。このデータでは、個人の性格特性、感情価、健康状態、およびデモグラフィック情報などについて詳細なデータを収集しており、広く一般に公開されている。本研究では、これらデータを用いて、日本人と米国人との比較分析を実施することで、より信頼性・妥当性の高い知見の獲得を目指した。本調査で検証した心理モデルは複数あったが、例えば、怒りという感情に着目し、それに対する制御方略が、ストレスや人生満足感といった心理に対して及ぼす影響について検証した。さらに文化的自己観（相互協調的自己観と相互独立的自己観）が怒りの制御方略に及ぼす影響も合わせて検証した。分析手法としては共分散構造分析を用い、日本人と米国人との比較分析をすることによって、その文化差を主に検討した。

(2). 生理指標アプローチの方法について

(2)‐①では、調査協力企業に勤務する日本人従業員のうち、人間ドックを受診した 40 歳以上の男性社員を対象に調査を実施した。参加者には、同意書の記入をした後、通常の採血で取られた血液の一部を本調査用に提供してもらった。加えて、満足感、ストレス、職場に対する評価といった心理変数に関する質問紙への回答もしてもらった。本調査の学術的な背景として、CTRA（Conserved Transcriptional Response to Adversity）に関する知見を用いた。個人の身体を構成する様々なたんぱく質は遺伝子情報を基に作成されるが、個人が置かれた環境もしくはその状況をその個人がどのように知覚するかに

よって、たんぱく質の生成に影響が及ぼされることがこれまでの先行研究から指摘されている。CTRA は、ストレスや孤独感といった社会的要因の影響によって、それが過剰/過少に生成されることが分かっており、個人の健康状態を測定する生理指標として妥当であることが一連の研究によって示されている（例えば、Cole et al., 2015; Fredrickson et al., 2015; 2013）。ただし、これまで得られた知見は米国人を対象にしたものであり、日本人を対象にした研究はこれまでなされていない。さらに企業や職場といった経営学的な文脈によって CTRA を議論した研究もこれまで無かった。これらの点について検証することが本研究の新規性である。さらに、(2)－②として、血液中生理活性物質を用いたストレス状況および適応状況の評価バッテリーを構築した。具体的には、5000 名以上の日本人のストレス・血液中生理活性物質データベースから、ストレスやうつ病に関わる生理活性物質を選択し、ストレスやうつ病を評価するための血液検査項目を確立。データベースから独立した就労者集団を対象にした、同血液検査結果とストレス、適応状態、およびうつ状態の照合、分析により、妥当性を検証。さらに支援的介入を施行した場合の検査結果を検討した。ストレスあるいは仕事に対する満足感といった心理状態に対して、詳細な観察や面談によって可視化するほかに、血液検査という客観的で大量処理可能な方法で可視化できることを検証した。

４．研究成果

(1)‐①：状況サンプリングに関して、これまでの調査から得られた知見として、以下のものがある。まず、相互協調的自己観が優勢な日本人では、独立的な状況よりも協調的な職場状況において、よりポジティブな感情が高まる（もしくはネガティブな感情が低まる）という仮説を研究代表者らはもっていたが、これについては、予想通りの結果を得ることが出来た。そして、この結果は、伝統的な日系企業と外資系日本法人企業という一般的に人事制度が異なるとされる企業タイプで分けて検証しても、違いが見られなかった。しかし、職場満足に対して、外資系企業の従業員では、独立的自己観と協調的自己観の双方がポジティブに影響を与えるのに対し、日系企業の従業員では、独立的自己観のみポジティブな影響を及ぼし、協調的自己観は影響を及ぼさないという違いが見られた。

(1)‐②：a のウェブサーベイでは、上記で得られた職場満足に対する協調的自己観の影響のインパクトが日系企業と外資系企業の日本人社員とでは異なるという結果をより一般的なサンプルを用いて再検証した。結果として、職場満足に対して、外資系企業の従業員では、独立的自己観と協調的自己観の双方がポジティブに影響を与えるのに対し、日系企業の従業員では、独立的自己観のみポジティブな影響を及ぼし、協調的自己観は影響を及ぼさないという状況サンプリングで見られた傾向と同様の結果が得られた。さらに、本調査では、回答者が所属する企業の成果主義の浸透度合い（例えば、成果主義の導入割合、360 度評価の導入程度）についても回答をしてもらったが、この度合いは日系企業に比べて外資系企業は有意に高く、さらに協調的自己観は成果主義の導入程度が高くなるにつれて職場満足にポジティブな影響を与えるという知見が得られた。これらの一連の結果について、研究代表者らは『従来、日系企業では集団の維持機能が放っておいても上手く機能していた一方で、外資系企業では集団の維持機能を意識的に培ってきた。しかし、昨今の社会経済的・文化的な理由によって、現代の日系企業では集団維持機能をサポートする土壌が失われてしまっている可能性が高い。そして、維持機能が失われた場合、協調的な人は職場満足を感じないだろう』と解釈した。この知見は、現在論文にまとめており、経営系の国際ジャーナルに投稿する予定である。

b のウェブサーベイにおいては、自分の価値が個人達成志向的（競争志向）であるにもかかわらず周囲の環境（職場環境）の競争性が低い場合の不一致で、もっともメンタルヘルス不調へと結びつきやすいことが確認された。これらの成果の一部についてはストレス科学研究に掲載され、また、別途心理学系のジャーナルにも投稿中である。また、特に非正規雇用者や無職者においては、日本文化の価値観とのずれが経験されやすいことなども見いだされ、国際誌 Frontiers in psychology に掲載された。また、これらを総合して、競争志向性にかかわる個人主義が日本のメンタルヘルスにもたらす弊害についても検討し、Frontiers in psychology や psychologia などの国際誌に掲載された。

(1)‐③：MIDJA/ MIDUS データを用いた分析については、非常に多岐にわたる成果が出ているが、ここでは特に感情制御における怒りの文脈に着目した研究知見について言及する。先行研究では、怒りの対処方略として、抑制・表出・コントロールの 3 つが主に議論されてきた。本研究ではこれらの対処方略が、社会的不安を介して知覚されたストレスに対して影響を及ぼすという媒介モデルを想定した上で、日本人と米国人とでの共分散構造分析を用いた比較分析を実施した。結果として、ストレスに対して怒りの抑制という対処方略は社会的不安に媒介されることが示された。さらに抑制と社会的不安の相関の高さは、日本人が米国人よりも有意に高いという結果も示された。さらに、この 3 つの感情制御方略に対して文化的自己観が先行要因としてどのような影響を及ぼすのか、さらにこれらの感情制御方略が結果として人生満足感にどのような影響を及ぼすのかについて次に検討した。具体的には、独立的・

協調的の 2 つの文化的自己観から 3 つの感情制御方略を経て人生満足につながるパスモデルを想定し、共分散構造分析を用いて日米比較を実施した。結果として、米国人では独立的自己観と怒りの抑制・表出との間に有意な負の相関が見られた一方で、日本人では正の相関が見られた。これらの知見は既に論文にまとめ公刊されている。

(2). 生理指標アプローチで得られた成果については以下となる。(2)‐①について、本研究で用いた生理指標である CTRA は、先行研究では人生満足感との関係で議論されている。そこでは人生満足は大きく分けて 2 タイプあり、1 つは個人の欲求を満たすという意味での快楽的(Hedonic)な満足感、もう 1 つは社会への貢献や人生における自己の意味といった人生の意義的(Eudaimonic)な満足感である。そして、先行研究において、快楽的(Hedonic)な満足感は個人の健康にネガティブな影響を及ぼす一方で、意義的(Eudaimonic)な満足感はポジティブな影響を示すことが指摘されている。ただし、これまでの先行研究は欧米の参加者を対象にしたものであり、日本人においても同様の結果が得られるかについて検討したものはなかった。加えて、本研究では企業に勤務する従業員に焦点を当てており、職場環境に関する個人の心理状態が CTRA に及ぼす影響について検討したという意味でも独創性のある研究であった。結果として、まず人生満足感と CTRA の関係については日本人を対象にした本研究においても先行研究と同様の知見が得られた。すなわち、快楽的(Hedonic)な満足感は健康状態にネガティブな影響を示した一方で、意義的(Eudaimonic)な満足感はポジティブな影響を示した。さらに、職場に対する誇りや周囲との結びつきといった職場環境に対する個人の感情は健康状態にポジティブな影響を及ぼすことが示された。この結果は、職場における仕事のやりがいや絆といったものが健康状態に影響することを実証したという点で意義がある。さらに、(2)‐②の CTRA 以外の生理指標としてストレス・うつ血液検査と満足度や適応状況との照合を行った結果から、強いストレスを感じてうつリスクが高まっている場合には、上司の公正な態度、経営層との信頼関係、個人の尊重、公正な人事評価、キャリア形成、職場の一体感、ワーク・エンゲージメントといった項目に対して強い不満や不信を持っていることが示された。これは CTRA による検討結果と一致した方向の事実を示していると考えられた。健康経営という言葉が頻繁に用いられている昨今の状況において、その重要性をサポートする知見であると考えられる。この知見については、既に論文にまとめ、医学系の国際ジャーナルに現在投稿中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　17　件）

① Yamaguchi, A., Kim, M.S., Oshio, A., & Akutsu, S. (2016). Relationship between Bicultural Identity and Psychological Well-Being among American and Japanese Older Adults. *Health Psychology Open*, 3(1), 1-12.

② Akutsu, S., Yamaguchi, A., Kim, M.S., & Oshio, A. (2016) Self-Construals, Anger Regulation, and Life Satisfaction in the United States and Japan. *Frontiers in Psychology*, 7:768.

③ Boiger, M., Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Mesquita, B. (2016). Protecting autonomy, protecting relatedness: Appraisal patterns of daily anger and shame in the United States and Japan. *Japanese Psychological Research*, 58, 28-41.

④ Uchida, Y., & Oishi, S. (2016). The happiness of individuals and the collective. *Japanese Psychological Research*, 58, 125-141.

⑤ Yamaguchi, A., Kim, M., Akutsu, S., Oshio, A. (2015) Effects of anger regulation and social anxiety on perceived stress. *Health Psychology Open*. 2(2), 1-9.

⑥ Ford, B. Q., Dmitrieva, J. O., Heller, D., Chentsova-Dutton, Y., Grossmann, I., Tamir, M., Uchida, Y., Koopmann-Holm, B., Floerke, V., Uhrig, M., Bokhan, T., & Mauss, I. B. (2015). Culture shapes whether the pursuit of happiness predicts higher or lower well-being. Journal of Experimental Psychology: General, 144, 1053-1062.

⑦ 笹川果央理・竹村幸祐・内田由紀子. (2015). 自己価値の随伴性と従業員の心理的傾向. ストレス科学研究, 30, 131-137.

⑧ Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6:1490.

⑨ Uchida, Y., & Norasakkunkit, Y. (2015). The Neet and Hikikomori spectrum: Assessing the risks and consequences of becoming culturally marginalized. *Frontiers in Psychology*, 6:1117.

⑩ Matsuoka K, Yasuno F, Taguchi A, Yamamoto A, Kajimoto K, Kazui H, Kudo T, Sekiyama A, Kitamura S, Kiuchi K, Kosaka J, Kishimoto T, Iida H, Nagatsuka K. (2015). Delayed atrophy in posterior cingulate cortex and apathy after stroke. *International Journal of Geriatr Psychiatry*, 30, 566-572.

⑪ Kasahara E, Sekiyama A, Hori M, Kuratsune D, Fujisawa N, Chida D, Hiramoto K, Li J,

Okamura H, Inoue M, Kitagawa S. (2015). Stress-Induced Glucocorticoid Release Upregulates Uncoupling Protein-2 Expression and Enhances Resistance to Endotoxin-Induced Lethality. *Neuroimmunomodulation*, 22, 279-292.

⑫ Yamaguchi, A, Kim, M.S., & Akutsu, S. (2014). The effects of self-construals, self-criticism, and self-compassion on depressive symptoms. *Personality and Individual Differences*, 68, 65-70.

⑬ Ogihara, Y., & Uchida, Y.(2014). Does individualism bring happiness? Negative effects of individualism on interpersonal relationships and happiness. *Frontiers in Psychology*, 5:135.

⑭ Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2014). How do Japanese perceive individualism? Examination of the meaning of individualism in Japan. *Psychologia*, 57(3), 213-223.

⑮ Park, J., Uchida, Y., & Kitayama, S. (2014). Cultural variation in implicit independence: An extension of Kitayama et al. 2009. International Journal of Psychology, Online Version.

⑯ Yasuno, F., Taguchi, A., Yamamoto, A., Kajimoto, K., Kazui, H., Kudo, T., Kikuchi-Taura, A., Sekiyama, A., Kishimoto, T., Iida, & H., Nagatsuka, K. (2014). Microstructural abnormality in white matter, regulatory T lymphocytes, and depressive symptoms after stroke. *Psychogeriatrics*, 14(4), 213-221.

⑰ Yasuno, F., Taguchi, A., Yamamoto, A., Kajimoto, K., Kazui, H., Sekiyama, A., Matsuoka, K., Kitamura, S., Kiuchi, K., Kosaka, J., Kishimoto, T., Iida, H., & Nagatsuka, K. (2014). Microstructural abnormalities in white matter and their effect on depressive symptoms after stroke. *Psychiatry Res*, 223(1), 9-14.

〔学会発表〕（計　27　件）

① Satoshi Akutsu, Fumiaki Katsumura, Shinobu Kitayama, Yukiko Uchida.When interdependence fails in Japan: Work attachment in domestic versus foreign-owned companies. The 17th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, San Diego, California, USA. 2016.1.29.

② Satoshi Akutsu, Fumiaki Katsumura, Shinobu Kitayama, Yukiko Uchida. The interaction between one's interdependence and the perception of other's interdependence: Effects on emotional reaction and work evaluation in Japan. The 17th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, San Diego, California, USA. 2016.1.28.

③ **関山敦生**. **xMAP テクノロジーを活用したうつ病超早期診断とメンタルヘルスの支援. ルミネックス学術セミナー（招待講演）. 千里ライフサイエンスセンター（大阪府・豊中市）**. 2015.6.04.

④ Fumiaki Katsumura, Satoshi Akutsu, Yukiko Uchida, Shinobu Kitayama, Yuji Ogihara. Differential Impacts of Employees' Cultural Self-Construals on Job Satisfaction and Workplace Social Relationship Between Japanese Companies and Foreign-owned Companies in Japan. The 16th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, USA. 2015.2.27.

⑤ Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. Does individualism damage interpersonal relationships and subjective well-being in Japan? Longitudinal examination for a causal link. The 16th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, USA. 2015.2.27.

⑥ Satoshi Akutsu, Yukiko Uchida, Fumiaki Katsumura, Yuji Ogihara, Shinobu Kitayama. Do Japanese workers feel lonelier in local Japanese companies than in foreign-owned multinational companies in Japan? If so, why? - A cultural psychological inquiry. The 16th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, USA. 2015.2.26.

⑦ Ogihara,Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., Uchida, Y., & Kusumi,,T. Are unique names increasing? Rise in uniqueness and individualism in Japan. The 16th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, USA. 2015.2.26.

⑧ **内田由紀子**. **こころと幸福：日本的幸福観考察. 第36回全国大学メンタルヘルス研究会（招待講演）, 龍谷大学（京都府・京都市）**. 2014.12.11.

⑨ Ayano Yamaguchi, Min-Sun Kim, Satoshi Akutsu. The Effects of Self-Construals and Anger Expression on Subjective Well-Being. NCA 100th Annual Convention 2014, Palmer House Hilton, Chicago, USA. 2014.11.22.

⑩ Ayano Yamaguchi, Min-Sun Kim, Satoshi Akutsu. The Effects of Self-Construals, Anger Expression, and Social Anxiety on Perceived Stress. NCA 100th Annual Convention 2014, Palmer House Hilton, Chicago, USA. 2014.11.20.

⑪ A.Sekiyama. E.Kasahara, S.Tokuno.

Preemptive psychiatry based on serological detection of high-risk subjects after stress. 9th International Conference on Early Psychosis, Keio Plaza Hotel, Tokyo. 2014.11.17-19.

⑫ 内田由紀子. 若者の幸福感と文化的基盤：個人主義と関係志向の狭間で. 日本社会病理学会第30回大会(招待講演), 下関市立大学(山口県・下関市). 2014.10.5.

⑬ 荻原祐二, 内田由紀子, 楠見孝. ユニークになりたい親は子どもにユニークな名前を与えるか？個人主義指標としての個性的な名前の検討. 日本心理学会 第 78 回大会, 同志社大学今出川キャンパス（京都府・京都市）. 2014.9.11.

⑭ 阿久津聡. 変容する日本社会と組織：職場のメンタルヘルスと幸福感の検証. 日本心理学会 第 78 回大会, 同志社大学今出川キャンパス（京都府・京都市）. 2014. 9.10.

⑮ 内田由紀子. 日本におけるニート・ひきこもりとグローバリゼーション. 日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学今出川キャンパス（京都府・京都市）. 2014. 9.10

⑯ Uchida, Y. Cultural Construal of "Interdependent Happiness" in Japan: Cultural Psychological theories and empirical evidence. The 14th European Association for Japanese Studies（招待講演）, University of Ljubljana, Ljubljana, Slovenia. 2014.8.28.

⑰ 阿久津聡. 文化変容と維持：「こころの性質」の変化についての社会・文化心理学的考察. 日本社会心理学会 第 55 回大会, 北海道大学(北海道・札幌市). 2014,7.27.

⑱ 内田由紀子. 文化変容と心の適応. 日本社会心理学会第 55 回大会, 北海道大学（北海道・札幌市）. 2014,7.27.

⑲ Ogihara,Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. Are unique names increasing? Individualization in Japan. The 22nd International Congress for Cross-Cultural Psychology, The University of Reims Champagne-Ardenne, Reims, France. 2014.7.16.

⑳ 関山敦生. ストレス負荷、うつ病、統合失調症患者における血液中サイトカイン、ケモカイン濃度プロファイルの検討. 第 110 回 精神神経学会, パシフィコ横浜（神奈川県・横浜市）. 2014.6.26.

㉑ 内田由紀子. 「文化変容と心の適応」"ワークショップ：文化心理学の新展開：神経科学、生命科学、発達科学、そして社会科学との接点を探る". 日本社会心理学会第 54 回大会, 沖縄国際大学（沖縄県・宜野湾市）. 2013.11.2.

㉒ 内田由紀子. Japanese well-being and its change under globalization. In symposium: Psychological basis of social inequality in health. The International Conference on Social Stratification and Health. 東京大学（東京都・文京区）. 2013.9.1.

㉓ Uchida, Y. Directions in research on well-being: Strategies for achieving well-being in changing cultural contexts and under stressful situations. 12th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences. Reimers Foundation, Bad Homburg, Germany. 2013.5.22

㉔ 関山敦生. ～健康経営に役立つヘルスケアサービスをご紹介します～. 関係 3 省（総務、厚労、経産）による健康寿命の延伸セミナー, 大阪合同庁舎（大阪府・中央区）. 2014.2.13.

㉕ 関山敦生. 血液検査によるストレス把握とうつ病発症回避サービスの提供. 未病社会の診断技術研究会（招待講演）, 東京大学（東京都・文京区）. 2013.12.13.

㉖ 関山敦生. 大うつ病、統合失調症における血中サイトカイン・ケモカイン濃度プロファイルの検討. 第 33 回精神神経科診断学会, ピアザ淡海（滋賀県・大津市）. 2013.11.7.

㉗ 阿久津聡. 年功制から成果主義への人事制度変遷を阻む社員のストレス～社員の心理的適応を向上させる人事施策の検討～. 第 65 回全国能率大会優秀論文発表大会, アルカディア市ヶ谷（東京都・千代田区）, 2013.10.02.

６．研究組織

(1)研究代表者
阿久津　聡（AKUTSU, Satoshi）
一橋大学・大学院国際企業戦略研究科・教授
研究者番号：90313436

(2)研究分担者
内田由紀子　（UCHIDA, Yukiko）
京都大学・こころの未来研究センター・特定准教授
研究者番号： 60411831

関山敦生　（SEKIYAMA, Atsuo）
大阪大学・薬学研究科・寄付講座教授
研究者番号： 30403702

(3)研究協力者
北山忍　（KITAYAMA, Shinobu）
米国ミシガン大学・心理学部・教授

スティーブコール　（COLE, Steve）
米国 UCLA・医学部・教授